

接続助詞「し」の文論的考察

小林幸江

(1993. 11. 1受)

0. はじめに

a. 私はオーストラリア人だし、名前はジョーです。

(オーストラリア。以下、国名はその国出身の学生の文を表す)

b. 父は会社員だし、親切です。(モンゴル)

aは学生の自己紹介で耳にした文である。冒頭から接続助詞「し」が飛び出し、唐突な感じがした。bは学生の作文にあったものだが、全体の流れの中でこの文だけが浮き上がっており、不自然な感じを与える。上の文の唐突さ、不自然さは何によるものなのか。

「し」は接続する語の語形が比較的やさしいためか、多くのテキストの初期の段階で、「共通の要素の列挙」を表す接続助詞として提出されている。¹⁾その際、「し」の持つニュアンスはどのように学生に理解されているだろうか。上のa, bは「～だし」を「～で」とすれば、自然な文になる。どうも学生たちは「し」も「で」(一般にテの形: 名詞に続く場合といわゆる音便の場合は「で」となるが、それ意外は「て」となる。以下「て」と言う)もいっしょくたに“and”と意識しているようである。

教室での導入の際にも「雨も降ったし、風も吹いた」「〇〇さんの部屋は広いし、明るいです」のように共存する事実を並べたて、付け加えていく例が次々と学生に示される。そこで、学生の頭の中に「し」=「て」=“and”という理解が生じてしまうのではないだろうか。

c. きのは雨も降ったし、風も吹きました。

→ きのは雨も降って、風も吹きました。

d. 〇〇さんの部屋は広いし、明るいです。

→ 〇〇さんの部屋は広くて、明るいです。

c, dのように「し」と「て」を入れ替えても文がおかしくなければ、多少のニュアンスの相違はあってもコミュニケーション上問題はない。しかし、実際は

e. 「今の芸能界には裕ちゃんのような人はいないし、もう出て来ないわね」

(『白い序章』)

のように意味を強調するためのたみかけて言う場合には「て」では言い替え難いもの、また

f. マーケティングというのはいい品物をそうぞうするし、正しい値段を決めるし、広告をするし、この品物売るのことで。 (フランス)

のように「こと」でまとめられる連体修飾節の中で「し」を用いると落ちつかない文になるものもある。²⁾

学生たちが教室で教えられる「し」の用法は「て」で言い替えられる場合に限られているようだが、上の e, f に見るように実際の「し」の意味・用法はそれだけではない。では「し」にはどのような意味・用法があるのか、次にそれを考えてみたい。

1. 「し」の意味・用法

文献から、「し」の意味・用法についてまとめると次のようになる。

- ① 複数の事実や条件をあげて強調する。(森田良行 1984)
- ② 二つ以上の事実を並べあげて、それらの累加を材料とする立論(判断)を導く。(国立国語研究所 1970)
- ③ 並列する理由・原因を表す「～から」「～ので」。(山田俊雄 1981)
- ④ 否定の推量を表す語の下につく。(山田俊雄 1981)

以上、見てみると、事柄を並べたてることが「し」の中心的な用法と言えそうである。しかし、並べたてただけなら、「て」によっても表せる。「し」と「て」にはどのような意味の相違があるのだろうか。

c. きのは雨も降ったし、風も吹きました。

d. ○○さんの部屋は広いし、明るいです。

これらの文は、次のように「て」でも言い替えができる。

c' きのは雨も降って、風も吹きました。

d' ○○さんの部屋は広くて、明るいです。

両者を比べると、c', d' はきのうの出来事、○○さんの部屋の様子について述べた二つの文をくっつけて一つの文にしており、この場合「て」は、いわば接着剤の働きをしていると言えよう。一方、c, d は、ことさらきのうの出来事、○○さんの部屋の様子を強調しているように思われる。c, d を聞くと、思わず「だから何なの?」または「それでどうしたの?」と聞き返したくなる。この部分が実は「し」と「て」の意味の異なるところではないだろうか。「し」は、

次の例に見られるように、ある<判断>を導くためのある種の<提示>を示していると言えよう。

男の人と同じ質量の仕事は必ずやれるし、残業もO. K. だから、編集記者として男とすべて同じ条件にしてほしい。(『気がつけば騎手の女房』)

しかし、「し」による<提示>はその後にいつも判断を伴うわけではない。

<判断>の現れ方はいろいろである。例えば、「___し、___し、……」のように<判断>の部分が省略され、暗示的となり、その結果、表現が婉曲的となることもあるし、「そんなことしたら、後がこわいしなあ」のように「し」が終助詞的に用いられ、「控えめ」な表現となることもある。³⁾ また、省略されるのではなく、次の例のように<判断>がその文から飛び出してしまう場合もある。

「保育園に行きたくないヨー」「どうして?お弁当食べたり、遊んだりできないじゃないの」「お友だちもいないし、先生の言うこともわからない」

(同上)

サンローランのアトリエは一月下旬のオートクチュール・コレクションをひかえて多忙であった。夜も遅くなったし、日曜日にもアトリエに出た。

(『白い序章』)

上の例では「保育園に行きたくない」という判断を先に述べ、次にその理由を述べている。また、もう一つの例では「多忙であった」という事実判断を述べ、次にその内容について説明している。いずれも文の枠を越え、「し」が文と文との関わりに関与している例である。

従来の文単位の文法の範囲を飛び越え、文と文との関わりというもう少し大きな枠組みでの考察が必要となってくる。この文と文との関わりは「文論」の対象となる。文相互の意味関係に関わる主な文法的形式として、宮地(1971)は次の四つを挙げている。

- (1) (特定の)助詞・助動詞
- (2) 指示詞
- (3) 接続詞
- (4) 応答詞

(2)から(4)までは説明の必要はないだろう。(1)の具体例として、次のものが挙げられている。

① ナゼナラ……ナノダ。

② ナゼナラ……ダカラダ。

③ ソノウエ……モ……シテイル。

④ ソノウエ……サエ……シテイル。

⑤……ハ……ダ。ソレニ……ハ……ダ。

これらはいずれも文脈の助けを必要とする表現形式である。いわば文脈語とも言うべきこの一連の表現形式の中に「し」も含まれているわけである。

「し」のこの特徴的な用法については、既に次のような指摘が見られる。

①寺村秀夫(1984)⁴⁾

○「し」はその背後の統括命題により支えられており、それがわからなければ、全体の本当の意味はわからない。

○統括命題は節の連なりの前、または後に言い表されることもあるが、また表面には姿を表さないことも多い。

②伊藤 勲(1988)⁵⁾

○ある一つの文単位だけで考察したのではその用法を十分に把握できないことが少なくない。接続助詞「し」の用法を十分に把握し、理解するために「テーマ・説明型」という用法を下位分類として新しく提示する。

両論文とも「し」のこの特徴的な働きをよく指摘している。特に伊藤は「テーマ・説明型」という項目を設けて、この「し」の特徴的な働きを説明しているが、本稿では、さらに深く、文と文との関わりにおいて「し」はどのような用法を示すのか、「し」の文論的考察という面から、詳しく分析した。

なお、本稿で資料としたのは次のものである。

吉永みちこ『気がつけば騎手の女房』集英社 1989 (「気」と略す)

平岩弓枝『白い序章』中央公論社 1987 (「白」と略す)

朝日新聞・朝刊 1993年8月1日～8月6日 (「朝」と略す)

2. 「し」の文論的考察

宮地(1971)⁶⁾は接続詞により、二文を一文にまとめたり、一文を二文に切ったりすることができるということについて「文構造として接続助詞などのあらゆる句格は質的にかかなりの部分を文章構造における文関係(おおまかに言えば語格、句格に対しての文格)の解明に適用しうるところがあると言える」と述べている。

「し」についても同様のことが言えまいか。

そこで、文と文との関わりにおける「し」の用法を考えるためには、まず、文単位での「し」の用法を見てみる必要がある。その際、先に示した(1)「し」による「提示」の部分の相互の関係と(2)「提示」の部分と「判断」の部分との関係に分けて考えてみたい。

2-1 文単位での「し」の用法

(1) 「し」による「提示」の部分の相互関係

「し」はある判断を導くための<提示>として「A し、B し、……」のように事柄を並べたてていくわけだが、その際、A、Bの間には、次のような関係が見られる。()内は上記の資料名を示す。

①付け加える

Aに付け加える形で、Bが述べられているもの。「それに、しかも」という意味で用いられている。文例の量としては圧倒的に多かった。

「お友達もいないし、先生の言うこともわからない」(「気」)

男の人と同じ質量の仕事は必ずやれるし、残業もO. K。(「気」)

この部屋には日本製の炊飯器もあるし、日本の調味料もある。(「白」)

冒頭で示した例文eや次のような例では、Aの事実を強調するため、たたみかけBを述べている。

私も誘わなかったし、彼女も行きたがらなかった。(「白」)

どうも私一人が新入りのような感じがしたし、実際にもそんな風に扱われた。(「気」)

②対比する

「し」をはさんでA、Bが対比して表されているもの。「一方」という意味で用いられている。次の初めの例では「夏は～、冬は～」と対比になっている。

これだけのいたって単純な作業だけれど、夏は汗びっしょりになるし、冬は入口から北風が吹き込んで身体中冷えきった。(「気」)

六十代以上の人は青春だった戦争中への郷愁があるようだろうし、戦後生まれの人にとっては民主主義も平和も当然のような楽観論があるように思う。(「朝」)

③反対の場合を述べる

Aも然り、しかし反対の場合のBもあり得るということを述べたもの。「そうかと言って」という意味で用いられている。

人間お金がかかると、執念深くなるらしく、運よく的中したときはうれしくて忘れられないし、取りそこなったときはくやしくてこれまた頭にこびりついている。(「気」)

だから幸せだといつてのぼせることもないし、不幸せだと思つて絶望することもない。(「氣」)

以上、「し」による<提示>として上の①～③を挙げることができる。これらは意味的にそれぞれ2つ以上の事柄の並べたてにより成立するもので、文中に複数の「し」が現れ得る。その際、「し」の従属節と文末に同じ表現のくり返しが見られ、文型上の特色として symmetrical または parallel clause となることがある。⁷⁾

意見はしばしば言うのが自分のためだし、周りのためなんです。(「朝」)
関東所属馬二千頭の名前ぐらい全部記憶に叩きこんであるつもりだった
し、騎手の名前、調教師の名前も残らず知つてゐるつもりだった。(「氣」)

(2) 「提示」と「判断」の関係

「提示」つまり前件の部分とそれから導き出される判断、つまり後件の部分との関係について、先の資料より、次のものが認められた。

(a) 前件が後件の原因、理由を述べる

日本語の教科書に出てゐるような「　　し、　　しするから(ので)　　」という形をとる文例はなかった。その代わり「　　し、　　から(ので)　　」という形がよく見られたが、文例としては「から/ので」という理由、原因を表す印も省略されて、「　　し、　　し、　　」または「　　し、　　」という方が多かった。

金、土になつてあんまり馬の出入りが多いと当然忙しくて、新たな原稿の校正もできないし、時間はかかるし、予想も当りにくくなるので、取材不十分のカドでドラックマンが上役から小言を言われる。(「氣」)

「夜道の一人歩きじゃあるまいし、大丈夫ですよ」(「氣」)

(b) 前件が後件の補足説明をする

前件の内容について、その程度、状況などを後件でさらに補足的に説明しているもの。

ただヘルメット姿の学生は一人もいなかったし、みんな丸腰で、女性もスカートの人がほとんどだった。(「氣」)

ろくに話も聞いてくれなかったし、「女か、女ならお茶くみでもやってくれるか」という調子だった。(「氣」)

初めの例では「ヘルメット姿の学生は一人もいなかった」と言つた後、では

どんなかこうだったかを次に補足的に述べている。

(c) 前件が後件の例を示す


前件が後件の内容についての一つの例となっているもの。

将棋でも五十才の米長邦雄名人が七度目の挑戦で最年長名人になったし、
このところ熟年棋士の活躍が目立つ。(「朝」)

これは実際には話の折れ現象とも考えられるが、「し」の用法として考えた場合、よく見られる例なので一項目を立てておく。

2-2 文と文との関わりにおける「し」の用法

以上見てきた文単位での「し」の用法をまとめると次のようになる。

「 ___ し, ___ し,  」

提示

判断

①付加

②対比

③反論

(a) 理由

(b) 補足説明

(c) 例示

これらの用法はそのまま文と文との関わりを見た時にも認められる。

(1) まず、文単位での「提示」部分の相互関係は文と文との関わりでは並列的な関係になる。「判断」の部分はさらに飛び出して行くことになる。⁸⁾

①前文に付け加えて後文を言う

「私がこんなこと言うのは沖田さんが三紗の近いところにいるからよ。おまけに三紗は苦労知らずで、真面目でいささかおっちょこちょいじゃない。気は優しすぎるし、親切だし、危なっかしくて……」(「白」)

そんな会話があって三紗はすぐにトルコへのバカンスを計画し始めた。三紗のメゾンは兄の采配でこの前のコレクションを大量生産に廻す手順を終えて一息ついている。二軒のパリの店の経営も順調だし、敏郎がそっちにも責任者をつけてくれたからまかせておいて何の心配もない。(「白」)

初めの例では、最初の文で「私がこんなことを言う」理由を述べ、次の文、そ

は神様扱いよ。商売は上手だし、実際すごくもうかっているし……」

(「白」)

「断って下さい。あたしの帰国はプライベートなものだし、なんにもお話することなんかありません」(「白」)

- (b) 後文は前文の程度や結果、状況などを補足的に説明する

サンローランのアトリエは一月下旬のオートクチュール・コレクションをひかえて多忙であった。夜も遅くなったし、日曜日にもアトリエに出た。

(「白」)

私だって競馬狂だ。関東所属馬二千頭の名前ぐらい全部叩きこんであるつもりだったし、騎手の名前、調教師の名前も残らず知っているつもりだった。

(「気」)

- (c) 後文は前文の具体的な例を示している

思いっきり手間も材料費もかけてみる。材料を探しに、まる一日かけてデパートの食品売場を見て回るのもいいし、広尾の世界マーケットなどの輸入ショップへ足を運んでもおもしろい。(「朝」)

「なんというか、こうした遺跡の中において、ここに生きた人々のことをあれこれ想像していると、自分がいつの間にかその時代に溶け込んでいくようで……」「海に恋人を失った女性もあるだろうし、航海に成功して大金持ちになった男もいるでしょう。みんなどんな顔をして、この道を歩いていたのか、そんなことを考えていると一日がすぐ過ぎてしまっ……」

(「白」)

ここで、冒頭の例文 a, b にもどって、その不自然さ、唐突さを上に述べた「し」の結果をふまえて考えてみよう。

a. 私はオーストラリア人だし、名前はジョーです。(オーストラリア)

b. 父は会社員だし、親切です。(モンゴル)

どちらも「～だし」を「～で」とすれば、自然な文になることは、前に述べた通りである。それでは、a, b は全くありえない不自然な文かと言えば、そうではない。次のような文脈でならありうるかもしれない。

a' 「失礼ですが、あなたはあの犯人と何か関係がありませんか」という問いに対して、「いいえ、人違いでしょう。私はオーストラリア人だし、名前はジョーです。」と答える場合は a もよさそうだ。つまり、a の文は「人違いでしょう」と

いう〈判断〉について補足説明を行っているのである。それが〈判断〉の部分が欠けているので、不自然または唐突な感じがするのである。


b' 「犯人はトラックの運転手でしょう。父はぜったいに犯人じゃない。父は会社員だし、親切です。」と答える場合はbも良さそうである。「父が犯人じゃない」という根拠の説明として、会社員であることと、親切であることを列挙している。「会社員であること」と「親切である」こととは、一般的に共存する事実とは言いがたい。そのため、bの文はバラバラなものを無理やりくっつけた感があり、不自然さを感じさせる原因となっているが、ある〈判断〉があって、その補足説明として必要であれば、一見矛盾するような事柄でも、話者の頭の中では矛盾なく共存しうるのである。⁹⁾

「し」のように文と文との関わりに関与しているものを学生によりよく理解させるためには、ある種の文脈の意識が不可欠である。それがないと、上のa、bのような不自然で、唐突な文を作ることになる。このことは、「～のです」の文についても言えることである。

3. 結論

以上のことをまとめると次のようになる。それぞれに簡単な例文を添えておく。

(1) 文単位での「し」の用法

「 _____ し, _____ し,  _____ し」

提示

判断

- | | | |
|------|-------|--------------------------------------|
| ① 付加 | …………… | この公園は広いし、きれいだ。 |
| 対比 | …………… | この公園は、春はさくらがきれいだし、
秋は紅葉がすばらしい。 |
| 反対 | …………… | 宝くじに当たればうれしいし、
当たらなくてもどうということはない。 |
| ② 理由 | | この公園は広いし、きれいだし、いつも大勢の
人でにぎわっている。 |
| | 補足説明 | この公園は入園料はとらないし、すべて国の費用
でまかなわれている。 |
| | 例示 | さくらだけでも10種類はあるし、この公園は木の
種類が多い。 |


(2) 文と文との関わりにおける「し」の用法

①並列的な関係

「_____。_____し、_____し、_____。」

- | | |
|----|--|
| 付加 | この公園は都心に近い。中も広いし、きれいだ。 |
| 対比 | この公園は春はさくらがきれいだ。秋は秋で紅葉がすばらしいし、眺めも最高だ。 |
| 反対 | 宝くじに当たればうれしい。当たらなくてもだめもとだし、どうということはない。 |

②「判断」と「提示」の関係

「_____し、_____し、_____。」

- | | |
|------|--|
| 理由 | この公園が人気があるのは当然だ。広いし、きれいだし、都心にも近い。 |
| 補足説明 | この公園はいつでもオープンしているわけではない。夕方6時になれば閉まるし、月曜は定休日だし、冬の間は休みとなる。 |
| 例示 | この公園は木の種類が多い。さくらだけでも10種類はあるし、松も5、6種類はある。 |

以上、文構造での「し」の機能がそのまま文と文との関わりにおいても見られることを示した。本稿では「し」を例に「文章構造と文構造とは相関関係を持つ」という宮地¹⁰⁾の指摘を証明することになった。

最後に「し」についてもう一つ。

本論では先に示した資料から文例をとったが、ほとんど小説からとられ、新聞からはわずかに数例とれたにすぎない。新聞といっても「し」の文例があったのは家庭欄、広告、投書、連載小説、ひととき、天声人語などで、ニュース記事、解説には一例も見られなかった。これは「し」のもう一つの特徴を物語っているのではないだろうか。

すなわち、読者に正確なニュースを伝えることを第一の使命とする新聞では、当然、ニュース記事、その解説、社説など論説文では情緒的、主観的表現は避けられ、論理的な文の展開をめざしていくことになる。そのため文の前後関係は接続詞などにより明確に示される。

一方、「し」はどうかと言えば、前文と後文とのつなぎは文の流れの中でその関係が決まる。また、文の飲み込み、省略も多々行われ、表現は暗示的となる。さ

らに、上に見たように「し」によって並べたてられる事柄も客観的に共存する事実だけでなく、話者の主観によって決まるということを考えると、

「し」は主観を基軸とした表現である。

とすることができるだろう。

そのため、論説文には現れにくいのだろう。構文的にも「し」が「文としての独立度を高く保つ接続詞であり、そのためモダリティ度が高い」という事実が報告されている。¹¹⁾

注

- 1) 『日本語教材概説』(北星堂 1992)で「し」の提出課を調べると、次の通り。
『日本語初歩』第22課、『初級日本語』第18課、『日本語の基礎』第35課、『文化初級日本語』第13課。
“Modern Japanese for University Students Part I” 第20課。
- 2) 南 不二男 1974 pp. 148-153
- 3) この用法について水谷信子 1990 (pp. 38-39) は「相づちを打ちながら、話を聞くという日本語の習慣と関係が深い」とし、「相手の反応を見ながら話を進めるための省略が行われる」コミュニケーションの一つの形として紹介している。
- 4) 寺村 秀夫 1984
- 5) 伊藤 勲 1988 p.92
- 6) 宮地 裕 1971 pp.210-234
- 7) ALFONSO, Anthony 1968 pp.557-564
- 8) 文と文との関わりという点から「し」を見ているが、①の並列的な関係では「判断」の部分がさらに飛び出していくことも考えられ、「し」のかかる範囲もさらに広がることになる。そうになると、単に二つの文の間の関係の問題ではなく、一つのまとまりのある文章の中で「判断」の部分と「提示」の部分があることも考えられる。
- 9) 『新明解国語辞典』 1981 p.461
- 10) 宮地 裕 1971 pp.210-234
- 11) 今井 新悟 1992 pp.62-75

参考文献

- ALFONSO, Anthony 1968 "JAPANESE LANGUAGE PATTERNS" Sophia University
- 伊藤 勲 1988 『し』の用法『国際学友会日本語学校紀要』第13号
- 今井 新悟 1992 「モダリティ形式のモダリティ度」『日本語教育』77号
1977 『岩波講座 日本語文法Ⅱ』岩波書店
- 河原崎幹夫・吉川武時・吉岡英幸編 1992 『日本語教材概説』北星堂
- 金田一京助編 1981 『新明解国語辞典』三省堂
- 国立国語研究所 1970 『現代語の助詞・助動詞 用法と実例』秀英社
- 寺村 秀夫 1984 「並列的接続とその影の統括命題——モ、シ、シカの場合」
『日本語学』8月号
- 日本語教育学会編 1983 『日本語教育辞典』大修館書店
- 水谷 信子 1990 『日本語教育の内容と方法』アルク NAFL 選書
- 南 不二男 1974 『現代日本語の構造』大修館書店
- 森田 良行 1984 『基礎日本語3』角川書店
- 山田 俊雄他編 1981 『角川新国語辞典』角川書店

On The Conjunction “SHI” And Its Usages

KOBAYASHI Yukie

SHI is presented at the early stage in most textbooks of Japanese at elementary level because of its simple form change. It is explained as a conjunction used to link parallel clauses. Based on that definition, most students mistakenly think that SHI is equivalent to “AND” and interchangeable with TE/DE.

Now let us examine the following examples.

- (1) Watashi wa Oosutorariajin de, namae wa Joe desu.
- (2)* Watashi wa Oosutorariajin da shi, namae wa Joe desu.

The statement (2) is unnatural unless a very specific context is given. The question now arises : Why does the statement (2) sound so unnatural ?

A considerable number of studies have been made on SHI and it has been pointed out that SHI should be discussed beyond sentence level. What seems to be lacking, however, is clear classification of its functions.

The purpose of this paper is to explore the conjunctive SHI further, re-classifying its functions.